



精密機器メーカーから

介助犬訓練所

柳本忠二さん(70) 上

老犬から学んだ癒やし之力

人工芝を敷き詰めた介助犬の訓練所に、柳本忠二さん(70)の野太い声が響く。「シット(お座り)」「ウエード(待て)」「テーク(持ってこい)」



1日2回、介助犬の訓練に励む柳本忠二さん＝奈良市

「おまえ、かしこいなー」。ご褒美には何度も体をさすってあげる。言うことを聞かないときは「何しやってはいけないことを覚えて5年になる。」

え込ませるためだ。毎日午前と午後の2回、30分ほどラブラドルレトリバーたちを相手に訓練をする。柳本さんが、NPO法人「近畿介助犬訓練所」を奈良市郊外の丘陵地に立ち上げて5年になる。

盲導犬や聴導犬などがあるが、主に手足の不自由な人たちが助けるのが介助犬。ただ、柳本さんは、寝たきりや認知症のお年寄りの身の回りを世話するのに、介助犬は役立つと考える。

創業した精密機器メーカー「レザック」(大阪府八尾市)の経営は2年前に息子に任せた。以来、奈良市の訓練所に併設した自宅に住み込んで、現在は8頭と生活を共にする。人をサポートする犬には

引退した最長老のトピー(16歳)が教えてくれた。「ここはどこや」。十数年前、同居していた認知症の義母は、夜中に家中を杖でたたきながら、歩き回った。ところがトピーを義母の部屋に入れると、不思議と義母の心が落ち着いて。介助犬はきつと高齢者の助けになる。柳本さんは、犬の訓練に興味を持ち、仕事の合間に介助犬の養成に必要な愛玩動物飼養管理士の資格などをとった。

犬には癒やしの力があると、というのも柳本さんの持論だ。これは、介助犬を柳本さんは小さい時に出会った、ある子犬をいまでも思い出す。(佐藤秀男)